

「ハイコンセプト（新しいことを考える人）」の時代

-----次世代の働き方・次世代に生き残る人材-----

1. はじめに

表題は 2006 年にダニエル・H・ピンク著のアメリカのベストセラー本を大前研一が訳者となり日本で紹介したビジネス本です。まず、本書の概要を説明し、次に働き方の未来について厚労省の提言を紹介して、子供や孫に伝えたい次世代の働き方、生き残る人材について考えてみたい。

2. 左脳と右脳の働き

① 左脳は右半身を制御し、右脳は左半身を制御する

脳の「体側性」。左脳に損傷があれば、右半身が麻痺。右脳に損傷があれば左半身が麻痺。

② 左脳は「逐次的に」処理し、右脳は「全体的、瞬時に」処理する

左脳は連続性のあるものごとの認識や動作の順序のコントロールが得意。

右脳は多くのものを一度に見て全体的な形状を把握。

③ 左脳は「文」を、右脳は「文脈」の処理を得意とする

左脳は順序よく推論し、分析能力に秀でていて言語を操る。

右脳はその言葉の感情的な面を読み取る。

「左脳も右脳も単独で働くことはできない。日々の生活における言葉を文脈の中でとらえる」

④ 左脳は「詳細を分析」し、右脳は「大きな全体像」としてとらえる

一般的に左脳は情報の分析を行い、右脳は統合を得意とする。右脳はバラバラの要素を集め、そこから物事の全体像を認識する能力に優れる。

●バランスのとれた「右脳プラス左脳思考」とは

「右脳と左脳を別々に語ることがどれほど魅力的であっても、実際にそれらの二つの半球は協働することで全体像として統合的に機能し、一個の完全な脳を形成するようにできている。」

3. これからのビジネスマンを脅かす「3つの危機」

① 第一の危機---「過剰な豊かさ」がもたらす新しい価値観

安くて機能的なものが巷にあふれる時代になり、機能的なだけでは人は満足しない。

感情面に重視した心を豊かにする新しい価値観が求められる。

② 第二の危機---次から次へと湧き出す「競争相手」

コンピューター、ソフトウェア等の情報化産業、財務分析、放射線医学などあらゆる種類の「左脳主導型ホワイトカラーの仕事」が、インド、中国等の諸外国に移行しつつある。

③ 第三の危機---そんな脳では、すべて代行されてしまう！

ルーチン化された仕事、つまり、一連の規定作業や反復的に手順に分割できる仕事は、コンピューターに取って代わられる可能性が高い。

典型的な左脳主導型の三つの職業（プログラマー、医者、弁護士）

処理能力、定型的、分析的、情報やアドバイスの提供等はソフトウェアが代行する。

「創造力」、「潜在的知識」「大きな全体像が描く能力」、全体的なケア、カウンセリング等が求められる。

4. 右脳が主役の「ハイ・コンセプト/ハイ・タッチ」時代へ

① 時代の流れ（4つの社会の移り変わり）

・農業の時代（農夫）＜18世紀頃＞

生きるために農業だけをすれば良かった（強靱な肉体と不屈の精神力）

・工業の時代（工場労働者）＜19世紀頃＞

産業の機械化、分業化が進み、巨大工場や効率化が進み経済が活況を呈する。

大量生産の時代では、「右脳主導思考」はほとんど意味のないものとみなされる

・情報の時代（ナレッジ・ワーカー）＜20世紀頃（現在）＞

大量生産は舞台の奥へと押しやられ、代わって情報や知識が先進国諸国の経済を推進する。

ナレッジ・ワーカーは、「左脳主導思考」に熟達している。

・コンセプトの時代（創造する人、他人と共感できる人）＜21世紀（これから）＞

「クリエイターや他人と共感できる人、パターン認識ができる人、物事に意味を付加できる人、などによって作られる人」へ変化する。

先進国が再び発展するにつれ、右脳主導思考が社会的、経済的な面で主導的な役割を果たす。

② 今の仕事を続けていいか？（3つのチェックポイント）

・この仕事は、他の国なら、もっと安くできるのか？

・この仕事は、コンピュータならもっと上手く早くやれるだろうか？

・自分が提供しているものは、この豊かな時代の中でも需要があるのか？

これは①・②がNOで③がYESの場合は生き残ることができる仕事である。

しかし、①・②がYESで③がNOである場合は生き残ることが極めて難しい仕事になる。

③ ハイ・コンセプト、ハイ・タッチとは

ハイ・コンセプト=創造力のこと（下記の能力）

・パターンやチャンスを見出す能力、・芸術的で感情面に訴える美を生み出す能力、

・人を納得させる能力、・一見ばらばらな概念を組合せて何か新しい構想や概念を生み出す能力

ハイタッチ=共感力（下記の能力）

・他人と共感する能力、・人間関係の機微の機微を感じ取る能力、

・自らに喜びを見出し、また他の人々が喜びを見つける手助けをする能力

・ごく日常的な出来事についてもその目的や意義を追求する能力

④ 私たちがなすべきことは？

対価の安いナレッジ・ワーカーにはこなせず、処理能力の速いコンピューターにはできない仕事、豊かな時代における美的感覚と感情的要求を満たせるような仕事を行わなければならない。

「ハイ・コンセプト、ハイ・タッチ」の資質を身につけなければならない。

「ハイ・コンセプト、ハイ・タッチ」な「六つのセンス」

・デザイン、・物語、・調和、・共感、・遊び、・生きがい

5. この「六つの感性(センス)」があなたの道を開く

① 機能だけではなく「デザイン」

- ・「実用性」にプラス「有意性」(機能性を越えた美的アピールを備えたもの)
- ・MBA(経営学修士)に代わりMFA(美術学修士)が新たな価値ある資格になりつつある
- ・デザインとはビジネス(差別化)であり、ビジネスはデザイン(新たなカテゴリー)である
- ・未来を「設計」できる人

② 議論よりは「物語」

- ・誰にでもすぐにタダで検索できる時代の「情報の価値」
事実の価値は低くなり、事実を「文脈」に取り入れ、「感情的インパクト」を相手に伝える能力が重要になってくる。
- ・相手を説得するビジネスは「物語」?
相手を説得するビジネス(広告、カウンセリング、コンサルティング等)はアメリカのGDPの25%(一兆ドル)
- ・治療に大きな成果を上げて「物語医学」

③ 個別よりも「全体の調和」

- ・バラバラの断片をつなぎ合わせる能力(シンフォニー)
「分析」というよりも「統合する力」、「一見無関係に思える分野に関連性を見出す力」、「特定の答えを出す」というよりも「広範なパターンを見つける力」、「誰も考えなかったような要素の組み合わせから新たなものを創造する力」
- ・「見たまま」を絵に描く人、「頭の中」を絵にする人
- ・「これから成功する可能性大」の3タイプ
 - ▼「境界」を自分で超えていく人、
 - ▼何か「発明」できる人
 - ▼巧みな「比喩」が作れる人
- ・「先見の明に優れた人」の共通項——「全体像を見る力」、「パターン認識力」

④ 論理ではなく「共感」

- ・「共感」とは相手の状況に自分を置き換えて考えられる能力
- ・「共感」は「デザイン」の主要部分で、デザインはサービスを使う人の立場に立って考える。
- ・「共感」は「調和」とも関連し、共感力のある人は相手の全体像を見ている。
- ・「共感」は「物語」の中にも含まれる。

⑤ まじめだけではなく「遊び心」

- ・「遊び心」があると右脳が活性化する。
- ・「テレビゲーム」はトレンドをつかみ、関連性を描き、全体像を理解する格好の手段
- ・「心の知能指数」が高い人は、脳をバランスよく使える
- ・「笑いクラブ」の実践 エクササイズ(よく笑う患者は治りが早い)
- ・「笑い」は「満足のいく人間関係」が持てる人の習慣

⑥ モノよりも「生きがい」

- ・「生きがい」は私たちを突き動かす「最強のエンジン」(精神的満足度)

- ・「仏教」と「科学」が目指している同じゴール（人生の究極の目的は幸福の追求）
- ・仕事場にも「精神性」を持ち込んだ企業が伸びる
- ・「愉快的な人生」より「良い人生」を
 - 「幸福が大きければ大きいほど、生産性が高まり収入も増加する」
 - 「人が追求せざにいられない、第3の幸福の形がある。それは意義の追求だ。自分の最も得意なことを知り、それを自分より大きな何かに活かすことだ」
- ・「迷路」があなたをもっと自由にする（「迷路」は右脳を開放する）

6. 働き方の未来

前項まで、ダニエル・H・ピンク著「**「ハイコンセプト（新しいことを考える人）」の時代**」の概要を説明してきたが、本書はどちらかというところエリート層になるためのビジネス本である。若い人の未来の働き方について、厚生労働省が「**報告書「働き方の未来（2035）～一人ひとりが輝くために～**」（2016.8）」を提言している。以下、概要について説明する。

課題は、①少子高齢化社会、②技術革新の現状と予測、③技術革新のインパクト、本書の“第二の危機、第三の危機”と共通するものである。

働き方の提言は、①時間や空間にしばられない働き方に、②より充実感がもてる働き方に、③自由な働き方の増加が企業組織も変える、④働く人が働くスタイルを選択する、⑤働く人と企業の関係（正規も非正規もない）、⑥働き方の変化がコミュニティのあり方を変える、⑦世界と直接つながる地方の新しい姿、⑧介護や子育てが制約にならない社会、⑨性別、人種、国籍、年齢、LGBT、障がい、すべての「壁」を超える、以上の働き方に対しては現在の制度上の問題がある。

以上の働き方に対して制度のあり方を提言している。①働く人が適切に選択できるための情報開示（求人サイト？）、②大きな環境変化に対処するための制度（雇用契約）、③幅広いセーフティネットのあり方（保険制度、職業教育）、④新しい働き方に合わせた新しい社会保障制度（年金制度、税制）、⑤生涯教育の推進とあり方。

働き方の未来の考え方には**ストック型とフロー型**という考え方があり、厚労省の提言はこれからのフロー型の社会に移行する働き方に対する提言である。

ストック型の社会：積み上げたものを切り崩していくのが常識な社会

ストック型の社会とは切り崩していく社会で、最初に高く積み上げたものを後で徐々に崩していくことを指す。お金であれば、働いている間に貯金を貯め、老後ちょっとずつ切り崩していくことで生活を維持していくこと。資格であれば、最初に難しい資格を取得してしまい、その資格だけで生きていくこと。

フロー型の社会：必要な時に必要なものを生み出すのが常識な社会

一方でフロー型の社会というのは、必要な時に必要なものを生み出すことが求められる社会で、従来のストック型の社会の考え方では、積み上げたものを切り崩せば生活ができるという考え方である。しかしながら、長寿化やテクノロジーの変化の速さにより、一つのスキルを築いても陳腐化する恐れがあったり、貯金をしたとしてもお金が足らなくなる可能性もある。

貯金がなくなったらお金を稼げば良いし、スキルが陳腐化したら別のスキルを得るというもの。

7. さいごに

本書は2006年にアメリカでベストセラーになった本であるが、“これからのビジネスマンを脅かす「3つの危機」”は、2020年現在の日本のビジネスマンにもピッタリあてはまる課題である。今までは、良い学校→良い会社→良い人生というレールの上の生活だった考え方（左脳主導思考）が、これからは変化しそうである。

また本書では、これからのエリート層の像を描き、道を開くためには「六つの感性」を磨くこととし、感性の磨き方についてコメントしている。エリートになるためには、今までの専門的な知識に加え、他分野の知識も吸収し、その知識を統合して未来をデザインし、他人を説得できる能力を身につけ、社会に貢献できる人になりなさいということか。かなりハードルは高そうであるが、若い人には是非「六つの感性」の磨きにチャレンジし、右脳を鍛えてビジネス社会のリーダーになってもらいたいものである。

働き方の未来に対して厚労省が提言しているが、従来のストック型の社会からフロー型の社会に移行することに対する提言である。フロー型の社会は終身雇用制度や従来の退職金制度は崩壊していき、新たな社会保障制度が必要になってくるが、フロー型の社会では益々の格差社会が予想される。

フロー型の社会では、フローに流されるままでは底辺の人間になってしまう。右脳を鍛えて「六つの感性」に磨きをかけて自分の未来をデザインし、左脳を鍛えて必要な資格を取得し、必要なお金やスキルを適当にストックし、「生きがい」を見つけて生活することが、変化の激しいこれからの長寿化社会での成功者になる秘訣であると思う。